梅花女子大学
児童文学・絵本センター報

第2号
2007
3月20日

BAIKA

創作活動への支援

梅花女子大学児童文学・絵本センター長
横山　充男

児童文学科の卒業生で、単行本を商業出版したものは幾人もいる。わたしがつかんでいるだけでも、小川千歳、手嶋洋美、高橋たまき、井上林子、楠章子などである。いちばん新しいところでは、山下三恵が小川未明文学賞を昨年受賞し、学研から単行本として今年出版される予定になっている。単行本でなくとも、アンソロジーでの出版は、磯野理香、黒田志保子、中西翠など、さらに数がふえる。児童文学を志し、プロの作家をめざしている卒業生はもっとたくさんいるはずだ。

2006年に設立された「児童文学・絵本センター」は、卒業生のネットワーク作りと発表の場作りが主な目的であるが、一方でプロ作家をめざす人たちの支援センターの意味ももっている。趣味でやっている創作から、プロの作家へ移行するには、非常に強い意志と努力が求められる。しかしそれだけではプロへの門は開かれない。よほどの才能とチャンスにめぐまれた場合は別だが、ふつうは競争相手としのぎを削りながら、階段を一歩一歩登るしかないのだ。その方法は、なかなかアマチュアの人にはわからないし、見えづらいものである。

その点では、児童文学科の卒業生は非常にめぐまれている。プロの作家や研究者がいつでも母校で待っていてくれるわけだし、こうした「児童文学・絵本センター」なるものを用意してくれているのだ。そのめぐまれた環境を、最大限活用してほしいと願っている。

速報

新人作家の登竜門、「第23回ニッサン童話と絵本のグランプリ」絵本の部優秀賞に、梅花女子大学大学院児童文学専攻修了生、仙田まどかさんの作品「コートダジュールの虫歯」が見事選ばれました（2007年3月発表）。児童文学科学生・卒業生の本グランプリ受賞は、第16回童話部門優秀賞を受賞した手嶋洋美さん以来の快挙です。仙田さん、おめでとう！

オープンキャンパス

絵本制作展
絵本読み聞かせ会

2006年度
活動報告

7／22（土）、8／5（土）・6（日）・19（土）・20（日）、10／1（日）の計6回のオープンキャンパスにおいて、「絵本制作展」および「絵本読み聞かせ会」（来年度からは他の活動と合わせ、「おはなし会」と名称変更します）を行い、各回8〜9人、のべ51人の学生が参加しました。

会場は、諸事情から、7／22、8／5・6、10／1が学生会館1階の和室、8／19・20がA104教室という変則的なものとなりましたが、どちらの会場でも、学生制作絵本ならびに原画の創意を凝らした展示と、手作りの飾り付けにより、来場者には、暖かい雰囲気の中で絵本の世界を楽しんでもらえたものと思います。オープンキャンパスのメイン会場が学生会館2階ということもあり、来場者がより足を運びやすく、よりくつろいだ環境を提供できるのは、やはり和室の方なので、来年度は何とかすべての回を和室で行えないものかと思っています。なお、参加学生たちは、メイン会場での学科紹介ブースにおける対応でも活躍してくれ、これまた好評でした。

次に学生スタッフとして活躍してくれた倉谷美智子さんの感想を紹介します。

学生の立場から児童文学科の魅力をＰＲしたい、最終学年を迎えた自分自身の思い出づくりにもなるだろう、との思いから、スタッフとして参加しました。オープンキャンパスなので、来場して下さったのは高校生やその保護者の方々が中心でした。わざわざ遠方から来られた方や、期間中二度も見に来て下さった方もおられました。また、他学科のことを知りたくて来たけれど、展示を見て児童文学科に興味を持ってくれた高校生や、「本当に学生が作ったの？」と感心してくださった保護者の方もおられました。私の絵本と原画も展示させてもらっていたのですが、照れくさい一方で、見てくださる方々の反応に直に接することが出来て、とても有り難く、嬉しかったです。

絵本読み聞かせのときも、たくさんの方が真剣に耳を傾けてくれました。子どもにむけて読むのとは全然感覚が違うので緊張しましたが、よい経験をしたと思います。これからも学科の魅力ＰＲと、作品に接してくれる方の生の声を聞く絶好の機会として、是非たくさんの人に参加してもらいたいです。

（4年　倉谷美智子）

さまざまな反応にビックリ

豊川小学校・水尾小学校における 梅花おはなし会

2006年6月から12月（8、9月を除く）、豊川小学校（全5回）と水尾小学校（全4回）にて、小学生に絵本の読み聞かせを行いました。私たち学生4人が2人ずつ2グループに分かれ、それぞれ1クラス（約30名）の小学生に対し約30分間の時間をいただき、絵本3、4冊を子どもたちと共有する時間となりました。

私自身は梅花幼稚園で週1回子どもたちと絵本を読み合う「こうめ文庫」の活動をしていますが、今回のおはなし会では、その都度出会う子どもたちとは初対面であり、どのように私たちを迎えてくれるのか、組んだプログラムを受け入れてもらえるのか、毎回よい緊張感と不安と楽しみでいっぱいでした。

低学年は、思ったことをその感情のまま声に出して驚き、反論を唱えたり、笑う素直な反応があり、一方高学年になると声はなかなか出さないが豊かな表情の変化一つ一つが絵本に対する反応であり、学年による反応の違いを感じました。ただ、5、6年生になると「絵本なんて･･･。」と興味を持たない女の子もおり、全員が楽しめるプログラムを考えるのは難しいことを改めて実感しました。

子どもたちとの出会いはその場限りで残念で

すが、12月中旬にも関わらず半袖半ズボンで元気だった2年生の男の子、「私も寒くないで。」と言って上着を脱ぎ半袖をアピールした女の子。「絵本のお姉さんやん！」と言って、荒井良二ワークショップの時に声をかけてくれた女の子など多くの子どもたちが印象に残っています。

子どもたちは驚くほど元気で、いつもいつもその元気をもらっていました。充実した子どもたちとの時間を過ごす事ができ、貴重な機会を与えて下さったことに心から御礼を申し上げます。4月から中学・高校生と出会う日々となりますが、何らかの機会で絵本を紹介したり、絵本を楽しんだりする時間を共有できればと思っています。

（4年　仲田あゆみ）

第4回「子どもの本 フェスティバル in 大阪」2006年10月27→28

“梅花おはなしルーム”

昨年に引き続き、今年も「子どもの本フェスティバル in 大阪」（2006年10月27日・28日、大阪ビジネスパーク ツイン21）に参加させていただきました。

約1ヶ月前から準備を始めました。100冊あまりの絵本の選書、当日の段取りなどある中で、何より大変だったのはプログラム構成です。小さい子どもから大人の方まで楽しめるようなプログラムを考えることは大変でした。そしてプログラムの練習。参加スタッフの多くは学年が違うため、なかなかそろって練習が出来ず苦労しました。しかし、その甲斐あって、当日は初対面にもかかわらず多くの方に楽しんでもらえました。そして、

最後のプログラムでは、2日間の中で最高の“おはなし会”となりました。部屋中に笑い声が響き、急遽1冊絵本を増やしてしまうほど、その場が絵本の世界で包まれていたように感じられました。

私自身2度目の参加でしたが、去年も今年も通して言える大切なことは、やっぱり自分自身が楽しむことです。準備や、練習など大変なことが多い分、成功したときの感動は何ものにも変えることができません。ご来場していただいた方が楽しむだけでなく、参加しているスタッフも楽しまなければ成功したとはいえないと、今回参加して改めて考えさせられました。

絵本を通して子どもと触れ合える楽しみを、これからも大切にしたいと思っています。

（4年　平田朋子）

梅花 子どもの本フェスタ'06

地元・近隣地域の子どもたちや一般市民の方々に、大学祭（「小梅祭」）開催中のキャンパスへ足を運んでいただき、学生・卒業生と一緒になって、児童文学や絵本の楽しさを実感していただこうと、今年はじめて企画しました。11月11日（土）、12日（日）の両日、次のようなイベントや出し物が開催されました。

児童文学科同窓生フォーラム

児童文学科を卒業後、童話作家や絵本作家として現在活躍中の同窓生、手嶋洋美さん、楠　章子さん、井上林子さんをパネリストに、同窓会会長の氷室真理子さんの司会で「私の作品創作について」と題して開かれました。
創作にまつわるエピソードや作家をめざす後輩へのアドバイス、今後の抱負など興味深い話が聞けました。

詳しくは
児童文学会会誌
『かみひこうき』
第25号に掲載

児童文学会 模擬店

ー駄菓子屋 with 手作り玩具ー

学会委員を中心とする恒例の模擬店、今年は「ミルクばあちゃんの駄菓子屋さん」を開店しました。くじ引きをして枚数が決まるミルクせんべいが好評でした。

絵本制作展

例年、小梅祭期間中に行っている「絵本制作展」、今回も多数の個性豊かな作品を見ていただきました。

児童文学会卒業生 絵本展＆雑貨販売

原画
手づくり雑貨
人形・カード

卒業後も創作活動を続けている2人の卒業生、前川美成枝さんと上田かおりさんが原画や雑貨（手作りの人形やカードなど）を展示・販売し、人気を呼んでいました。

もり・けん ハーモニカ・コンサート

本学科非常勤講師（「児童書出版編集論」）であり、ハーモニカ奏者としてもご活躍のもり・けん先生のコンサート。鵜野祐介先生もボーカルで飛び入り出演し、秋にちなんだ日本の童謡や子守唄、モンゴル・中国をはじめとする外国の歌が、興味深いエピソードの紹介とともに演奏されました。観客も一緒に口ずさみ心温まるひとときとなりました。

荒井良二 ワークショップ

絵本とは何なのか……

2006年11月12日の「梅花子どもの本フェスタ’06」では、3番目のイベントとして、「荒井良二先生のワークショップ」がF棟7階の会議室で開かれました。荒井良二先生は、忙しい時間を割いて、東京からアシスタントの方と共に駆けつけられたのですが、会場に現れた先生は、ゆったりとした自由な雰囲気で緊張する空気を和らげ、会場いっぱいの参加者を魅力あふれる絵本の世界に、ぐいぐい引き込んでいかれました。

まずは、先生の指示に従って用意していた絵本制作用の紙が一人ずつに配布され、参加者や主催者が持ち寄った様々な画材が並ぶ中で、ページ数を書き込むことから作業が始まりました。そして、それぞれの手許の真っ白な絵本に、「最初から最後まで一本の線を引いて」との指示が出ると、会場はみるまに絵本作りの集中した空間に変貌し、皆夢中で絵本を作っていきます。「主人公を全部のページに描き入れて」との言葉に不思議な思いを抱きながら、皆思い思いに主人公を登場させていきます。その間を歩き回って、参加者の作品を見、一言二言しゃべりながら、先生も絵本を作っていくのです。いろいろなものを貼り付けたり、描いたり、そして文も入れていきます。

こんな絵本の作り方があったのか、絵本を作るってこんなにも自由で楽しいことなのか、そんな思いでわくわくします。ギャラリーとして見ていた人たちも、ついつい作りたくなって手を動かし始めました。学生が読み語りに行っている小学校から数名の参加があったのですが、子どもたちは真剣な表情です。さまざまな年代の人々が、約2時間、途絶えることのない集中力を持って絵本作りに没頭する会場は、何だかとってもいい感じです。

作品ができ上がり始めると、何人かの参加者の作品を壁面に映して、先生が読んで下さいました。皆笑いながら絵本の物語に浸ります。最初に引いた一本の線が、物語を進めていきます。その線の上と下に空間が広がります。最後に、先生が絵本とは何なのかを話されると、そのことばがすとんと心に落ちました。絵本は決して幼稚なものではない、絵本は素晴らしい、奥の深いものであること、それを具体的に見せて下さったワークショップでした。会場全体が、優しく、集中した、荒井良二の絵本ワールドになった素敵な時間でした。

会場外の受付では、荒井良二先生の本『きょうというひ』『ルフランルフラン2』が販売され、ワークショップ終了後はサイン会も行われました。皆が帰るまで、ずっと居て下さった先生は、一緒に行われていた絵本制作展も有志による手作り絵本と雑貨販売の店も、じっくり見て下さいました。帰途につかれたのはすっかり暗くなったころでした。点灯したクリスマスツリーを楽しそうに見上げながら、絵本作家荒井良二先生はさわやかに梅花を後にされたのでした。

梅花おはなし便

学生と卒業生の有志によって結成された絵本と語りの宅配便「梅花おはなし便」は、2006年12月16日（土）に梅花女子大学学生会館1階で、また12月23日（土・祝）には兵庫県播磨町立図書館で公演を行いました。16日はスタッフ8名、23日は4名が参加しました。
いずれも30分2回公演で、会場に集まった20名ほどの子どもたちといっしょにクリスマスの絵本を読み、またパネルシアター「クリスマスの12にち」では、ホワイトボードの上にかけた黒い布の上に、次々増えていく贈り物を見ながら、一緒に歌をうたいました。また23日の公演では人形劇「かいじゅうたちのいるところ」も上演し、大変好評でした。

梅花おはなし便いかがですか？

個人宅での誕生日会、幼稚園や図書館、学童保育、病院小児病棟など、子どもたちが集まる場所に出かけて絵本を読み合ったり手遊びや人形劇などを楽しんでもらう「おはなし会」グループです。スタッフは児童文学科の学生と卒業生です。ご希望に合わせたプログラムで、おはなしの世界に心はずませる楽しいひとときをお届けします。

プログラム所要時間　30～60分
活動時間　10：00～19：00
費用　スタッフ交通費のみ（実費分）

ご希望の向きはセンター事務局（072-643-6221）までお問い合わせください。また、スタッフとして参加したいという学生・卒業生の方もどしどしお申し込みください。

新聞メディアでも紹介

本センターが新聞メディアでも紹介されました。2006年8月15日読売新聞朝刊の「大学発06」、同年9月11日日本経済新聞夕刊の「夕悠関西」などです。また日本私立大学連盟『大学時報』312号（2007年1月5日）に加藤康子運営委員の寄稿「児童文学・絵本センターからの発信　梅花女子大学」が掲載されました。

梅花女子大に絵本センター

梅花女子大文化表現学部児童文学科が地域との交流や卒業生の活動を支援する「児童文学・絵本センター」を設立した。

19、20の両日に大阪府茨木市の同大学で行われるオープンキャンパスで、在学生や卒業生らが制作した原画や絵本約50点を展示するほか、絵本の読み聞かせ会を開催。10月に大阪市内で開かれる「子どもの本フェスティバル」でも絵本展示やおはなし会を開く。

幼稚園や図書館などに出かけて絵本を読む活動もしている。学科長の加藤康子教授は「児童文学や絵本は人と人の心をつなぐ懸け橋。オリジナルな作品をつくり、伝えていきたい」と話している。

問い合わせは同大学（☎072・643・6221）の鴻野研究室か加藤研究室へ。

（読売新聞に掲載された記事です。）

2007年度 センターの基本理念

活動計画

- 学生や卒業生、そして一般市民の方々が児童文学や絵本の研究・創作・伝達の活動を主体的・継続的に行っていくことをサポートする。 **学習 創作支援**
- 学生や卒業生が、児童文学や絵本を通して地元・近隣地域の子どもや一般市民の方々と交流する場を設けることにより、「心の架け橋」としての児童文学や絵本の今日的意義と重要性を地域社会にアピールする。 **交　流**
- 地域住民との交流を児童文学や絵本の伝達に関する実践研究に生かす。 **実践研究**
- 児童文学・絵本に関する情報交換・発信のステーションとなる。 **情報 ネットワーク**

運営組織・担当者（予定）　（敬称略）

- センター長：横山充男
- 運 営 委 員：加藤康子、田中裕之、鵜野祐介（事務局幹事）
- 事務局補佐：氷室真理子、手嶋洋美
- 学生スタッフ、卒業生スタッフ（ともに登録制）

活動方針

2006年度に行った活動を継続させるとともにいくつかの新規事業を実施する。

計画

①小学校での「おはなし会」の実施（前期のみ。後期は授業に移行）
②オープンキャンパスにおける「おはなし会」＋「絵本制作展」開催
③「子どもの本フェスティバル in 大阪」への
　「おはなし会」＋「絵本制作展」参加
④「梅花子どもの本フェスタ07」の開催
⑤「梅花おはなし便」の公演
（以上5項目は2006年度の活動の継続）
⑥センターＨＰの開設
⑦セミナーの開催：絵本の読み語り・ストーリーテリング他
⑧ **ストーリーテリング・コンサート**

コンサート

2007.10月13日(土)
PM 2：00～ 4：00

本学 澤山記念館 チャペル

デイビット・キャンベル氏
英国スコットランドを代表するストーリーテラー

待ってます！

☆☆☆ 学生 卒業生 スタッフ募集中！☆☆☆

児童文学･絵本センターでは、「梅花おはなし便」、「梅花おはなし会」、「梅花子どもの本フェスタ」「子どもの本フェスティバルin大阪」等に参加するスタッフを募集しております。学生・卒業生の皆さん、是非ご応募ください。お申込はセンター事務局（鵜野）まで。

学科創設25周年を迎えます。

所感

児童文学科は、2007年に創設25周年を迎えます。文学の中に児童文学という分野を樹立し、新しい研究者や作家、そして伝達者を育成するという熱い思いを抱いて、未開の土地に鍬を入れられた先達の方々が、今日の土台を作られてから、早四半世紀になります。生まれた幼子が自立する年頃です。

この児童文学科を取り巻く昨今の社会状況は厳しく、「子ども」をめぐる問題が山積しています。こうした中、子どもを描き、子どもへのメッセージを持つ児童文学の持つ意味は大きく、世の関心も少なくありません。今こそ児童文学を考える時期のはずです。ただ、どのように児童文学に向き合うのか、その方法は一つではないと感じています。

「作る」あるいは「伝える」という活動を実体験し、からだごとぶつかっていくことで作品に深く関わることができる喜びが、物語や絵本との出会いになることがあります。学生は、物語や絵本を作ることに、絵本を読み語ることに、心身を揺すぶられるような経験をし、そこを通して児童文学に向き合っているように思います。授業だけでは、なかなか納まりきれないこの体験を仲間と共にすることを求めている声が聞こえてきます。

児童文学に向き合うことは、「子ども」を考えることでもあります。その「子ども」を守るべき者、与えるべき者ではなく、共に生きる者と捉えるとき、「子ども」と「おとな」は近づきます。誰もが抱える「内なる子ども」にも「おとな」との関わりは課題の一つです。今こそ、もう一度児童文学の土壌となるものに目を向け、視野を広げて時代や地域を越えてみることが、これらの課題にヒントを与えてくれるのではないかと思います。

設立間もない児童文学・絵本センターですが、今、児童文学と向き合うための「情報」、そして「場」や「仲間」の拠点として、意味を持ち始めていると期待しています。

センター運営委員　加藤康子

編集後記

荒井良二さんの『きょうというひ』には、「きえないように」というフレーズが合計13回出てきます。先日6歳になったばかりの息子は、この絵本が大好きで、夜寝る前に時々枕元に持ってきては「一緒によもう」といいます。そしてページをめくりながら、すっかり暗記してしまった詞章を大きな声で唱え、「きえないように」のところでは、指を折って回数をかぞえながら詠んでいます。

「きえないように　きえないように
　ちいさなあかり　きえないように」

私たち児童文学・絵本センターの活動は、「しずかに　あかるく　きょうというひをてらし」てくれる「子どもの本」というロウソクが入る小さな家をたくさんたくさん作り、できた家にロウソクをともしていく、そしてその火が消えないよう見守る、そんな営みなのかもしれません。

「きょうというひの
　ちいさな　いのりが
　きえないように
　きえないように・・・」

（鵜野祐介）

BAIKA 1878

編集発行　梅花女子大学児童文学・絵本センター

事務局　鵜野祐介研究室　tel 072-643-6221　fax 072-643-7997
e-mail: uno@baika.ac.jp
〒567-8578 大阪府茨木市宿久庄2-19-5